



館長だより

山形県産業科学館

令和6年7月28日(日)

発行 館長 加藤智一

ホヤ

新幹線出張の帰り、乾燥させたホヤをちよつとずつかじりながら日本酒で一杯やる。なんてのが楽しみでした。程よい苦みが日本酒に合う。ところが、2024年7月25日朝日新聞天声人語には珍しく、生き物の話題で取り上げられていたのが「ホヤ」。その衝撃的な生体、なんと「自分の脳」を食べることで成長する生物だったのです。ホラーか？



「磯の風味 鮮明 ほや 風味無双 滋養豊富」

ホヤは、被囊(ひのう)と呼ばれる組織で覆われた海産動物で、海水に含まれるプランクトンを餌として生きています。生物学上では魚類、鳥類、爬虫類、哺乳類といった動物と同じ脊索動物に分類されています。

ホヤは2000種以上が存在するとされており、多様な形や色のホヤが世界中の海に生息しています。単体で岩場に生息する色鮮やかなホヤなど、見た目はさまざまですが「岩場などに固着する」という点は共通しています。

ホヤは2000種以上が存在するとされており、多様な形や色のホヤが世界中の海に生息しています。単体で岩場に生息する色鮮やかなホヤなど、見た目はさまざまですが「岩場などに固着する」という点は共通しています。

ホヤは幼生の頃、オタマジャクシみたいな形をして、海を泳ぎまわることができ、岩場のような安定した場所に固着して成体へと成長します。幼生から成体へと育つ過程で、成長の栄養とするためにホヤは自身の「必要のない器官」を栄養源にします。この「必要のない器官」にはなんと脳も含まれているというのです。

ホヤは雌雄両方の生殖器官を持っており、卵と精子を同時に水中に放出することで受精と産卵を行っています。卵は孵化から約3日ほどすると、脊索と背側神経索を含む尻尾と鰓裂、そして脳を持つオタマジャクシに似た姿に成長します。

幼生のホヤは餌を食べることができず、短い期間しか生きられません。その短い期間で、すみかとなる場所を探し、岩場のような場所に一生固着します。すみかを得て、成体となったホヤは岩場を探したり泳いだりする必要がなくなってしまうため、泳ぐための尻尾や筋肉、考えるための脳などは必要なくなります。

脳などいらなくなった部位を食べた成体のホヤには、栄養を得るための消化器官や、子孫を残すための雌雄の生殖器官などが残されます。その後、餌を食べ、年に数回産卵を繰り返しながら数年で一生を終えます。種類にもよりますが、例えば日本で食されているマボヤの寿命は4~5年ほど、毎年12月の満月から2~3回産卵期を迎えるそうです。

ホヤは無脊椎動物の中で最も人に近い生物ですが、その種としての生存戦略は、脳を発達させて繁栄してきた私達人類から見れば、まさに逆転の発想。脳は多くの栄養を必要とする訳ですから、住処から一歩も出ないと決めてしまえば、あとは最低限の栄養を補い、子孫を残す事だけに専念するという、極めて割り切った生き方。そのためには、余計な事を考えてエネルギーを消費してしまう脳など必要ない。見事なまでの割り切り方であります。

そんなホヤは、「ホヤの水もの」と言って、取り出した肉を短冊に切り、塩水を張って食べるのですが、塩水は、外皮を切り開いたときに出る汁を使うと、いっそう風味がよいそうです。このほか、しょうが入りの酢じょうゆで食べたり、酢みそ和えにしたり、1時間ほどみそに漬けたものをさっと焼くなど、各種の食べ方があって、どれもおいしい事を私は知っていますが、食べられるホヤは、逃げないし、逃げられないし、脳がないので恐らく気付きもしない。どっちが幸せなのでしょう。



ちなみに韓国では、誰かに対して「お前はホヤだ」みたいな言い方をすると、バカにしたような意味になるらしいのですが、それはホヤに対して失礼な言い方ですね。誰しも、生き方を否定されるのはいやなものです。